

「がんに負けない、がんから命を守る社会づくりを目指して～がん検診受診率向上促進プロジェクト『命を守るがん教育—先進事例に見るがん教育の取組』」事業

がん教育の先進事例を調査・取材した映像コンテンツを全国に配信し、子どものがん教育推進に役立てる

国民の2人に1人ががんに罹る「がん大国」でありながら、がんの正しい知識の普及が遅れている日本。今年度より学校教育の現場でがん教育の試験的な導入が始まるが、効果的な教育手法はいまだ確立されていない。本プロジェクトでは、がん教育の実施を担う全国の自治体や教育委員会にとって参考となるがん教育の先進的取り組みを映像コンテンツにまとめ、広く配信。がん教育の推進を支援している。

がん教育の先進的取り組みの事例を映像にまとめて全国の自治体・教育委員会に配信

国のがん対策については、2012年より新たながん対策推進基本計画がスタートしており、その中で、5年以内に健康教育全体においてがん教育のあり方を検討し、それに基づく教育活動の実施を目標とすることなどが示されている。これを受けて、文部科学省は2014年より小中高校でがんに関する保健教育を強化する方針を決定し、全国21県の70校でモデル事業を立ち上げた。したがって今年度は日本にとってがん教育元年といえるだろう。

こうした動きの中、2013年にNPO法人がん検診受診率向上促進協議会が2度の乳がんを克服したタレントの泉アキさんを会長に発足し、日本のがんの現状とがん検

診を取り巻く課題や問題点に取り組むプロジェクトをAJOSCの助成を得てスタートさせた。初年度は、がん検診とがん教育の重要性を啓発する冊子を作成し、全国1742市区町村の首長とがん検診担当部署に配布した。

これに続く次のステップとして、今年度は「命を守るがん教育—先進事例に見るがん教育の取組」と題し、がん教育の先進事例の実施内容や策定経緯、がん授業の様子や子どもたちへのインタビュー、家族の反応、さらにはがん教育による効果などを調査・取材した映像コンテンツを作成し、全国の自治体や教育委員会に配信する。冊子のがん教育の入門編とするなら、こちらは実践編といえる。同団体理事長の大田美紀さんは、今回の活動のねらいについて次のように話す。

「昨年作成した『がん検診とがんの教育』の冊子はおかげさまで大きな反響があり、1000部増刷しました。それは裏を返せば、がん教育の本格導入を前にして、『何をどう教えていったらよいかかわからない』という声が主管となる自治体や教育委員会に多いということです。このプロジェクトを通じて、地域格差や取り組み手法を模索する教育現場の課題を目の当たりにしてきました。懸念されるのは、お金をかけて立派な教材を作ることばかりに力が注がれ、がん教育が当の子どもたちにとって人ごとに



がん患者が小学校を訪問して行う「いのちの授業」風景



がん教育の先進事例を紹介した映像コンテンツ (DVD版)

「健康だからこそ、がん検診に行こう！」 がん検診 受けさせ隊

がんは誰でも罹る、身近な病気です。でも怖がらなくて、がんは治せる病気なんです。私は2度、乳がんになりましたが、こうして元気に楽しく、毎日を送っています。がんは、早期発見して、早期治療すれば体にも、心にも、そして経済的にも負担やダメージを軽くすることができます。

がんは自分で見つける時代です。さあ、がん検診を受けに行きましょう！



泉・アキ

なってしまいます。がん教育とはがんについての正しい知識を学ぶだけでなく、命の大切さを学ぶもの。その手掛かりを、先進的な取り組みの事例を参考に見いだしていただきたいと思っています」

豊島区と荒川区のがん教育の現場から子どもたちの生の声を発信

がん教育の先進的な事例として今回取り上げているのは、東京都荒川区と豊島区が小学校で実践している取り組みである。荒川区では、保健所の職員と医師が寸劇仕立てのユニークな「がん予防出前授業」を行っており、豊島区では、専門家と協働して独自の教材を作り実践的ながん教育を展開している。加えて両区では、NPO法人がんサポートかごしまが展開しているがん患者による「いのちの授業」を導入しており、これらの授業現場を取材し、さらに授業後の子どもたちにインタビューを試みている。

「子どもたちが授業を受けて何を考え、どう感じたかを知ることは、がん教育を進めるうえでとても重要なこと。にもかかわらず、これまで検証されてきませんでした」。大田さんは、今回、子どもたちの声を拾い上げ、発信できたことは、事業の最大の成果ととらえている。

担当者より



今年度の事業が
どんな成果を生むのか
楽しみです

NPO法人
がん検診受診率向上促進協議会
理事長
大田美紀さん

がん教育の本格導入を目前にしてそのあり方が模索される中、AJOSC助成事業として昨年作成した冊子はおかげさまで大きな反響を呼びました。続く2年目となる今回の事業がどのような成果を生み、そして今後のがん教育の発展にどうつながっていくのか楽しみです。2年にわたる支援に心より感謝いたします。

さらに子どもたちへの取材を通して明らかになったのは、大人が考えている以上にがんに対してさまざまな疑問を持っているということ。実際、先進的ながん教育の現場では、「がんとわかったときどんな気持ちになるのか」、「がんにはどんな種類があるのか」、「どのような原因でなるのか」、「どのくらいの確率で治るのか」、「どのような予防をすれば防げるのか」など、大人顔負けの専門的な内容や、がんの告知や心理面にも踏み込んだ質問がされている。がんについて、子どもたちが本当に知りたいと思っていることは何か。そして、それにどう応えていくのか。がん教育の課題と進むべき方向性が先進的な事例を通してわかりやすく映像で提示されたという点で、2年目の事業は画期的なものとなったといえるだろう。

「今回取材した『いのちの授業』では、子どもたちががんについて知りたいことを事前アンケートで募り、がん患者さんが自らの体験を通してそれに応えるという形をとっています。こういった活動を深めていくことで、子どもたちが生きることに考えるきっかけになり、そしてそれが大人にもフィードバックされていく。この事業でがん教育のひとつのあり方が見えてきました」

プロジェクト3年目となる来年度は、子どもたちの疑問に答える一問一答形式の「がん読本」の開発に取り組み予定だという。